

研修会の御報告

「聴覚障がい者の社会参加における現状と課題」

愛媛県聴覚障害者協会 手話通訳士 上場 ゆり 先生

9月30日(金)に、松山聾学校の特別支援教育地域支援事業における研修会を行いました。今回は、本校のキャリア教育推進連絡協議会委員でもある愛媛県聴覚障害者協会の手話通訳士、上場ゆりさんに御講演をいただきました。

上場さんは、手話通訳士として長年、聴覚障がい者の支援に携わってこられた方です。講演では、聴覚障がい者が社会参加をする上でどのような点が問題になっているのかについて、御経験を基にお話をいただきました。

以前、手話が今のように広まっていなかった時代は、社会の手話に対する理解や認識が十分でなく、聴覚障がい者(ろう者)の社会参加を支援する手話通訳に対する見方も違っていたようです。それが様々な取組によって、単なるボランティアとしてではなく、通訳者の守秘義務や研修、身分の保障という面も含めた一定の「通訳の質」を保障する制度として整える必要性が理解されるようになったそうです。半面、自治体の予算措置が十分でないことや地域格差が拡大している現状があり、実際の支援にも支障をきたしている面があります。そのため、手話言語法、手話言語条例の制定を通してこうした課題を解決し、生きる権利として情報・コミュニケーションの保障を確立し、聴覚障がい者の完全な社会参加を実現する必要があることを述べられました。

当日は、本校の保護者の方や地域の小学校や高等学校の先生方にも参加していただきました。日頃知る機会があまりない、成人の聴覚障がい者が置かれている環境や問題点について改めて考える良い機会になりました。



文化祭・福祉機器展示のお知らせ

10月21日(日)に行われる本校の文化祭で、トーシン松山補聴器センターの御協力をいただき、福祉機器展示を行います。屋内信号装置を中心とした聴覚障がい者にとって便利な機器を実際に操作して体験することができます。当日は是非、お立ち寄りください。

時間 : 12時00分から13時50分まで
場所 : 本館2階・学習室1

新製品の御紹介

やわらかいイヤモールド「ポップフィット」

シバントス社（シーメンス・シグニア補聴器のメーカー）から新しいイヤモールド「ポップフィット」が発売されました。イヤモールドの材質は、基本的には硬質・軟質の2種類ですが、ポップフィットは、シリコン素材を用いているため、軟質のものよりもさらに柔らかいのが特徴です。

シグニア社によると、シリコン素材を用いることで、柔らかくて楽に装着することができ、硬質・軟質のイヤモールドに比べて着け心地も良いとのこと。また、ピーピーというハウリングも起きにくいそうです。色は、全17色です。価格は9,000円（非課税）で、身体障害者手帳を持っている方なら、差額なしの自己負担金のみで作成できます。

柔らかいイヤモールドが好きで、作成してみたい方は、本校の聴能担当者まで御相談ください。



書籍の御紹介

「手話の歴史(上・下)」

ハーラン・レイン [著] 齊藤渡 [訳] 前田浩 [監修、解説]
各 2,500円+税 2018年6月刊行 築地書館



17世紀革命前夜のパリから出発し、手話を育みながら公的なろう教育の礎を作り、国を超え、ヨーロッパ・アメリカの2大陸をまたいで、手話コミュニティのネットワークを築いたろう者たち。

19世紀後半から、電話の発明者ベルを筆頭に「善意」の聴者たちが、ろう者の手話とその歴史を否定していく。逆境の中で、自らの人間的尊厳をかけて、手話言語とろう者社会を守ってきたろう者たちの闘い。これまで知られていなかった手話言語とろう教育の真の歴史を生き生きと描きだしながら、言語・文化の意味を問いかける名著。

《築地書館HP紹介記事より》

みみちゃん担当はまだ読んでいませんが、「善意の」聴者たちがどんなことをしたのか気になっています。監修は、大阪市立豊学校(現大阪府立中央聴覚支援学校)で教鞭をとられていた前田浩先生です。

研究会の御紹介

日本教育オージオロジー研究会 上級講座・公開講座の御案内

期 日 2019年1月12日(土)・13日(日): 上級講座
14日(月・祝): 公開講座
会 場 愛媛大学 教育学部・南加記念ホール
対 象 1月12日・13日の「少人数演習」は本研究会会員のみ
1月14日の「公開講座」は、非会員も可
参 加 費 上級講座: 15,000円、公開講座: 500円(会員外資料代)
参加申込 上級講座については、各地区の教育オーディオロジー研究協議会会員は、所属する研究協議会の担当者(四国地区は徳島聴覚支援学校の樋口先生)へ11月2日までに申し込む。公開講座の事前申込は不要。

※ 講座の詳細はHPを御覧ください



テレビで勉強しました

「村落手話」を守るということ

9月29日(土)放送のNHK教育テレビ「ろうを生きる難聴を生きる～故郷の手話を守りたい」に本校の卒業生である矢野羽衣子さんが出演していました。矢野さんは、現在、筑波技術大学大学院で手話の研究をしており、その研究は、珍しい「村落手話」の研究として注目されています。

日本で使われている手話には、大きく分けて2つのタイプがあります。

日本語対応手話 : 日本語の音声を伴いながら表す手話

日本手話 : 日本語とは別の言語体系を持つ手話

村落手話、ホームサイン 等も

ろう学校は、日本語対応手話を用いるところがほとんどです。また、日本手話は、ろう者の家族(デフ・ファミリー)や高齢のろう者等が用いています。実際には両者の特徴が混在した手話が使われていることもあります。村落手話は、地域(共有)手話とか手話方言とも呼ばれ、日本手話に属するものであり、日本手話とは違った特徴があります。番組では、矢野さんが研究している村落手話の一つである「宮窪手話」の「数」に関する表現と「時」を示す表現が例として紹介されていました。

「数」の表現では、6から10を示すときに、頬を用いる表現があります(宮窪手話には、他にも両手指を用いる表現、2桁以上の数の表現で例えば「15」を「1」→「5」のようにデジタル的に示す表現、「5万」を「万」→「5」とする等の語順が違う表現もあるそうです)。

また、「時」の表現では日本手話や他の手話言語で見られるような、未来は身体の前で表し、過去は身体の後ろで表すといった空間的なタイムラインではなく、過去を体の右側、現在は正面で示し、未来は別の表現方法で示すという表し方や、太陽の方角で時を示す表し方が紹介されました。過去と現在の表現は身体を基準にしたタイムラインに沿って表されているものの、未来の表現は過去と対照的な表現になっていないことについて、矢野さんは「(漁をする上で)その時々によって状況が変わるため未来の表現がないのではないかと仮説を述べています。

この手話言語が生まれた背景は、この地域にろう者が多く住んでいたことや、地域性(漁業に従事している人が多いこと)等が考えられるようです。

そして矢野さんは、中学生の時に経験したある出来事を語っています。それは、ろう学校の別の保護者が「島(宮窪)のは手話じゃなくホームサイン(で)手話とは違う」「ホームサインは言葉といえない」「日本手話とはかけ離れたもの」という言葉を矢野さんの祖母に投げかけたことでした。この言葉は、恐らく聞こえる人ではなく、同じろう者から発せられた言葉であろうことがうかがえます。つまり、当時聞こえる人が聞こえない人に対して示していた「手話は国語(日本語)に比べて不完全な言語」「手話は言葉ではない」という言語の差別化や序列化が、形を変えてろう者の間でも行われていたということです。村落手話は、使用する人が次第に減っています。矢野さんは、番組の中で「宮窪手話はでたらめなんていう人もいたけど『それを使って生活してきた者たちがいるれっきとした言葉なんだ』って伝えたい」と、自分たちの宮窪手話への想いを語っています。この出来事が、村落手話を守り、残し、後々に伝えたいという矢野さんの気持ちの背景にあるのかもしれませんが。

現在は、様々なマイノリティ(社会的少数派)の存在を認める風潮が以前より浸透していると感じます。手話の中でも、マイノリティである村落手話を言語として認めることは、その手話を尊重し、それを使っている人たちを尊重するということでもあります。

また、矢野さんと共同研究を行っている慶應義塾大学の松岡和美先生は、「宮窪の人たちは自然に手話を覚えて、聞こえる聞こえない、ほとんど考えずに普通の付き合いをしている。ここには障がい者っていうコンセプトは全くないわけですよ」と指摘しておられます。このことから、村落手話の存在は、単に珍しい、貴重なものというだけでなく、障がいというものの本質を問いかけているように感じます。





この記事は、次の資料を参考にして作成しました。いずれもホームページで公開されています。また、写真は、番組映像の一部です。

- 愛媛県大島宮窪地区の村落手話(地域共有手話)における二種類のタイムライン 矢野羽衣子(日本ろう福音協会)・松岡和美(慶應義塾大学)
- 愛媛県大島におけるピレッジサイン(手話方言)の保存及び言語学的分析のためのデータベースの構築

平英司(関西学院大学)・矢野羽衣子・松岡和美(慶應義塾大学)

第14回日本聴覚障害学生 高等教育支援シンポジウム

日時	2018年10月28日(日) 9:30 ~ 16:00	 
場所	早稲田大学 早稲田キャンパス 国際会議場	
参加費	無料	
参加対象	大学等高等教育機関に所属する教職員 大学等に在籍する聴覚障害学生 大学等に在籍する聴覚障害学生を支援する情報保障者 その他大学等における聴覚障害学生支援に関心のある方々	
主催	日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク (PEPNet-Japan) 国立大学法人 筑波技術大学	
共催	早稲田大学	
問合せ先	日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク (PEPNet-Japan) 事務局 (筑波技術大学障害者高等教育研究支援センター) TEL/FAX: 029-858-9438 E-mail: sympo2018@pepnet-j.org	

※ 6年前に愛媛大学を会場として行われた第8回シンポジウムでは、本校高等部の進学希望者が何名か参加し、それぞれ有意義な情報を持ち帰ることができたようです。今回は東京での開催ですが、興味ある方は是非足を運んでみてはいかがでしょうか。

また、主催である「PEPNet-Japan」のホームページでは、現在の大学における聴覚障がい者への情報保障の取り組みについて知ることができます。

ワイデックス社の「みみから。」というサイトで、「最新の補聴器関連情報」として(https://www.widexjp.co.jp/ha_choice/consider/info.html)、3つのトピックスが紹介されています。面白かったのが、この中の一つにあった「耳たぶ型」の補聴器。ただ、これは、ギズモード・ジャパンというサイトで8年前に紹介されていたものでした。このときは市販されていない、とのことでしたが、残念ながら今もそういう話は目にしません。

そのギズモード・ジャパンで、シグニア社のスタイレットという補聴器が紹介されていました。充電式で、見た目も補聴器っぽくなくワイヤレスイヤホンのようなデザインで、これなら着けてみたいと感じる人も多いかもしいないと思いました。ただ、価格は70万円~118万円とのことでした。



「みみから」で取り上げている残りの2つのトピックスは、「歯につける補聴器」と「発展途上国のための補聴器」です。どんなものかは、アクセスして直接御覧ください。このサイトは、耳の聞こえについて解説しているページや補聴器に関する雑学的なデータを掲載しているページもあります。

編集後記

「サイレントK」と呼ばれるプロ野球選手がいます。北海道日本ハムファイターズの石井裕也投手。社会人野球を経て、中日ドラゴンズから横浜ベイスターズとプロの世界で活躍し続けた選手です。その石井投手が先日、引退を表明しました。主にリリーフで登板する機会が多かった石井投手は、わずかに聞こえる方の耳に青い補聴器を着け、マウンドに上がると「集中するために」そのスイッチを切ってバッテリーに対峙していました。難聴のプロ野球選手ということで、普通よりも注目されてきたのは確かですが、聞こえる社会で結果を出し続けるための努力も、聞こえる人以上に積み重ねて来たはずで、ただそれは、石井選手にとっては当たり前なこと、こうした当たり前前の努力を続けていくことが社会での居場所を得ることにつながるのではないかと思います。

矢野さんは、みみちゃん担当が新採教員として赴任したとき小学部の5年生で、担任をしていた妹さんのことや、家庭訪問で行った宮窪のことなど、当時のことを懐かしく思いながら番組を視聴しました。仕事を辞めて研究活動をしているそうで、今後、さらに活躍されることを期待しています。